

2. 人間と労働

2.1 はじめに

2.2 人間の特徴

2.2.1 力の高度な制御・統一

2.2.2 力の自覚的な制御・統一

2.2.3 労働力と労働

2.2.4 知識と労働

2.2.5 補論：個人的労働の原理

2.3 労働過程

2.3.1 過程としての労働

2.3.2 労働過程の対象的な諸契機

2.4 コストとしての労働

2.4.1 労働過程と生産過程

2.4.2 生産物の二側面と労働

2.4.2 具体的労働と抽象的労働

2.4.3 新労働と旧労働

今回の課題

- 人間の労働の特質を明らかにする。
- 人間と自然との関係の経済的基礎を明らかにする。
- 自分自身で効率的に運営する生命活動としての経済活動の基礎的なカテゴリーを明らかにする。
- 経済的な観点から見た人間個人と動物個体との違いおよびその発生地点を把握する。

キーワード

労働、コスト、効率、知識、労働対象、労働手段、労働力、具体的労働と抽象的労働、新労働と旧労働

2.1 はじめに

ここでは、人間という生命の特徴を“労働”をキーワードにして考えてみたい。これを通じて、人間個人と動物個体とを区別する際のその役割も明らかになるだろう。

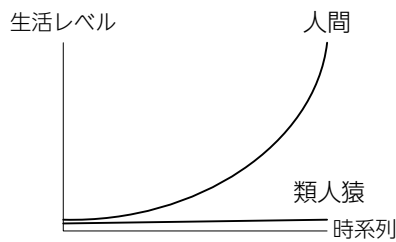
人間と、たとえば類人猿のような——人間以外の——高度な生命体との違いはなんだろうか。自然科学では、それなりに厳密な区別が可能である。しかし、自然科学が明らかにしているのは、自然存在としては、人間は類人猿とはそれほど変わらないということである。あるのはただ“程度の違い”だけである。

だが、結果から見ると、人間と類人猿とは根本的に違っている。人間は世界規模でのネットワークを作り、これを通じて世界中の人間がコミュニケーションする

ことができる可能性が生まれたが、猿にはそんなことはできない。人間は核兵器を作ることができ、これを通じて自分たちを滅ぼしてしまいかねない力を手に入れてしまったが、猿にはそんなことはできない、など。

だから、自然ではなく社会を分析する際には、重要なのは、どういう“程度の違い”が人間をその他の生物から根本的に区別する原因になったのかということなのだ。類人猿から人間が生まれてきた時には、類人猿と、生まれたばかりの人類との違いは“程度の違い”でしかなかっただろう。だが、この、なんらかの“程度の違い”が原因になって、上で述べたような根本的な違いを結果としてもたらしたのである。

図 1 初期条件の違いが決定的な違いだった



2.2 人間の特徴

2.2.1 力の高度な制御・統一

生命についてはいろんな考え方がある。だが、ここでは、現代社会の分析に必要なかぎりでは、生命というものを簡単に特徴づけてみよう。

生命あるもの（または有機的なもの）とは、「他者との関係において自己を維持するもの」のことである。「他者」というのは、自分と同じ種の生物のことだけではない。自分のまわりにある全自然のことである。

さて、生命あるものの中で最も発展しているのは人間である。例えば、人間は、個人として他の個人と友達になるが、だからと言って、自分の人格を失ってしまうわけではない。同様にまた、人間は鶏肉を食べるが、だからと言って鶏人間になるわけではない。これに対して、生命のない鉄は溶鉱炉の中では別の鉄と溶接されてしまうし、また酸素と化合すれば酸化鉄になってしまう。

吐き出された唾を見て、「これは人間だ！」と思う者はいないであろう。だが、唾は人間の体内にある限りでは、明らかに人間の一部である。切り落とされた髪の毛は人間の一部ではないが、頭皮から生えている髪の毛は明らかに人間の一部である。

それでは、このような生命を成立させているのはどんな活動なのだろうか。前回に述べた「物質代謝」こそは、自分のまわりの自然と関係しながら、そこから自分の生命の維持にとって必要なものを吸収し、こうして自己を維持していく過程なのである。そこで、物質代謝を思い出してみると、それは生産と消費という

契機からなりたっていた。

まず、人間の消費をトータルに考えてみると、確かに猿とはずいぶん違っている。たとえば、人間も猿もものを食べるが、人間はいろんな道具を使っているし、その消費をつうじて文化を形成している。だが、消化活動そのものは、人間も猿もたいして変わらない。消費を求める欲求についても、いろんなものを生産することができるからこそ、いろんな欲求が生まれるのである。こういうわけで、われわれは、この問題を考える際に、生産という側面から、見ていかなければならない。

たとえば、人間にとって、呼吸というのは、物質代謝の不可欠な要因である。と言うか、そもそも呼吸をしていなければ生きていられない。呼吸において、人間は、まわりの自然から空気を取り込み、それを体の中で酸素に変換して、二酸化炭素としてまわりの自然に帰す。酸素に変換するというのも、一種の生産、酸素の生産である（ただし、この講義では、今後「生産」と言ったとき、人間が自分の意志で自覚的に行う生産のことだけを指す）。だが、こんなことは、人間は本能のおもむくままにやっているのである。物質代謝の中で呼吸を選んで考察するかぎりでは、人間も猿も大して変わりがない。

しかし、人間は生産において、そのような、本能のおもむくままに行っている活動とは別の活動をもまた、行っている。そのような活動を労働と呼ぶ。

労働 (labor) とは、なによりもまず、自分自身の力

と自分のまわりの自然の力を、自分自身の媒介によって、高度に制御するということである。つまり、どの生物も行っている物質代謝を、しかし他の生物とは違って自分の過程として媒介するということである。

とは言っても、考えようによっては、人間以外の高度な生命体（たとえば類人猿）も似たようなことをしている。だから、この点では、違いは“自分”というものをどの程度確立できたかの違いであって、「程度の差」である。しかし、出発点における、この「程度の差」が蓄積・増幅されて、空間的に（すなわち部族から部族へと）伝播し、時間的に（すなわち世代から世代へと）継承され、それが結果として今日の人間と他の生物とのライフスタイルの違いを作っているのである。

それでは、今度は結果から、人間と、その他の高度な生命体との根本的な違いを見ていくことにしよう。

2.2.2 力の自覚的な制御・統一

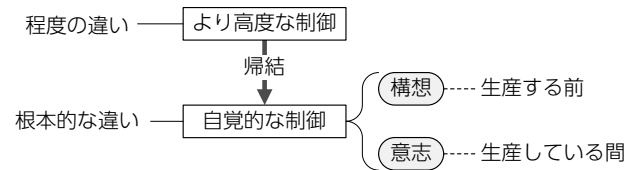
今日では、違いは程度の差ではなく、はっきりしている。すなわち、他の生命の物質代謝から人間を区別する労働の特質は、(1) 実際に生産する前に頭の中で生産しているという点（構想の実現）、そして(2) 実際に生産しているあいだは自分の意志のもとに自分の力を服させるという点（意志への従属）である。要するに、高度に制御するということが、自覚的に制御することに高まっている。言葉を換えると、現生人類の先祖は、出発点においてほんのちょっとだけ類人猿の先祖に較べて力の使い方が上手かったのだが、このほんのちょっとの違いが決定的な違いであって、それがやがて力を自覚的に使うということができるようになったのである。

たとえば人間は生物として寝ている間も手を動かして上げたりすることもあるだろう。だが、これは単なる物質代謝にすぎない。すなわち、労働ではない。

これにたいして、家への近道に岩が落ちていと仮定しよう。ここで、遠回りせずに楽に素速く効率的に家に帰るために、自覚的に、自分で意図して、自分で意識して、手を上げてその岩をどかせる場合には、同じ手を上げるという運動は、単なる物質

代謝ではなく、物質代謝の自分自身での媒介になる。すなわち、労働になる。

図 2 自覚的な制御の成立



2.2.2.1 構想の実現

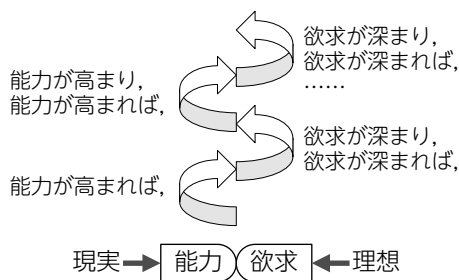
第一に、人間は、実際に生産する前に、まずもって頭の中で生産している。たとえばクモは実に上手に巣をつくる。私にはあんな器用さはない。また、現代科学の粋をもってしても、クモの糸をつくって、それを編んで巣をつくるというのは、なかなか困難なことである。だけれども、巣をつくる前に設計図を書いているクモってのは見たことがない。クモはしょせん、本能のおもむくままに巣を作っているにすぎない。これにたいして、人間の大工は、自分の自由なイメージにもとづいて、——たとえどんなに下手くそであっても——、生産することができる。人間の大工は、実際に生産する前に頭の中で完成予想図を描き、それを実現するために何部屋どういう間取りでどういう大きさなのかという設計図を描き、何日までにどういう作業（基礎工事とか外壁塗装とか）を終えるのかという工程表を作り、各作業にどういう材料（木材とか釘とかペンキとか）がどのくらい必要のかという建具表を作っている。このすべての事前作業において、大工がこれまでに大工仕事でつちかってきた知識を応用し、あてはめている。

重要なのは、たとえ大工が下手くそで現実にはシックハウスをつくってしまうとしても、実際に生産する前に頭の中で描いたイメージは決してシックハウスではなく、理想通りの立派な家だということである。ここで、シックハウスを作ってしまった人間の大工は理想と現実とのギャップを感じているのである。イメージ通りにならなかつたら、次はイメージ通りになるように工夫することができる。こうして、理想と現実のギャップを感じるということによって、労働する個人

は労働する能力（すなわち労働力——これについては後述する）を高めることができる。また、たとえ、能力の向上によって、自分のイメージ通りの家ができたとしても、それならば今度はもっと良い家をもっと楽に建てたくなる。木造一階建ての家を上手く建てたら、今度は人間は木造二階建ての家を建てたくなる。

一見すると、家を建てるのに設計図を書かなければならないってことよりも、本能で巣を作ることができるってことの方がすごいことのように見えるかもしれない。だが、それは話が逆なのだ。人間は頭の中のイメージに応じて生産物を多様化させることができ、そういう能力を通じて欲求を多様化させ、今度は反作用的に生産物を多様化させることになる。あるいはまた、人間は対象についての知識を利用して、どういうふうにしたらより少ない労働で同じ結果をもたらすことができるのか、工夫することができる。つまり、能力の向上と欲求の増大・多様化とがたがいにスパイラルを描くのである。

図 3 能力の向上と欲求の増大・多様化



ただし、実際には、個人の能力の上昇は常に壁に突き当たる。この壁を、人間は社会を形成することによって乗り越えるのだが、この問題については『3. 社会と労働』で論じる。

労働する個人とは違って、クモの場合には、クモの巣しか作れない（＝能力）からクモの巣以外のものを作ろうとしない（＝欲求）し、クモの巣以外のものを作ろうとしない（＝欲求）からクモの巣しか作れない（＝能力）。クモの生活はこういう悪循環に陥っている。だから、クモのライフスタイルは100年前も今日も大して変わらない。もし今後、クモのライフスタイルが変わるとしたら、それは、

自ら、自分の意志で、自分の自由で、自覚的に、選択したものではなく、まわりの環境の変化（たとえば気温が上昇したとか、新しい殺虫剤が散布されたとか）に本能的に適応したものだだろう（どういう有利さで生じたのか今一つ分からないような進化もあるが、人間の生活の効率化との比較で考える際には無視していい）。それは、労働する個人の場合とは異なって、自分の自由意志での選択ではなく、自然による選択（＝自然淘汰）である。

2.2.2.2 意志への従属

第二に、人間は、実際に生産しているあいだは、一つの意志、自分の意志のもとに、自分の肉体的・精神的な力を従わせる。

このような厳密な意味における意志とは、意志する自分と、この意志に従う自分とに自分を二重化するということである。人間は自分で自分に命令することができる。命令する自分と、命令される自分とに自分を分けることができる。こうして、(1)何よりも人間は自分を自分の対象にしている（自分が自分に働きかけている。あるいは同じことだが、自分が自分自身に対して、“お前は私の対象なんだよ、私は私自身を自由にできるんだよ”という仕方に関わっている）。たとえば、大工が釘を打つときには、本能のおもむくまま手を動かしているのではなく、“こうしろああしろ”と自分の意志で手を動かしている。

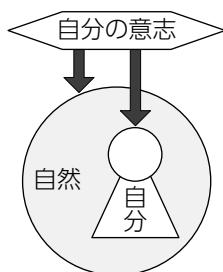
日常的に、“うちのワンちゃんの意志”などと言うこともあるが、ここで言っている厳密な意味での意志とはそのような単なる感情ではない。もちろん、ある程度は脳が発達した動物も自分の感情を持っており、またそれを表明する。しかし、ここで言っている厳密な意味での意志を達成したのは人間だけである。

そしてまた、人間も常に自分の意志で行動しているわけではない。たとえば、寝ている間に寝返りを打つのは決して自分の意志によるものではなく、本能によるものである。これにたいして、大工が家を建てる場合には、家という目的を達成するために、自分の意志で自分の手を動かしているのである。

このように自分の中の自然（つまり自分自身）を自分の意志に従わせるということを通じてまた、(2) 人間は、自分の外の自然をも自分の意志に従わせている。たとえば、大工は釘を打つために、自分の手のような自分の中の自然（つまり自分自身）を自分の意志に従わせるのと同時に、釘とか板とかのような自分の周りの自然をも自分の意志に従わせている。それを通じて、自分自身の能力を向上させ（たとえば釘を打つ腕前を上げ）、また自分の周りの自然を自分の都合のいいように変化させている（たとえばただの板を戸棚にする）。

人間は労働において、自分自身の身体と自分のまわりの自然との関わりをコントロールする“自分”（意志をもつ自分）をつくりだす。このような“自分”は、効率的運営のために、自分のまわりの自然という対象にとって、ありとあらゆるものを手段にして、この手段を改良していく。そのような手段は何よりもまず、自分自身、つまり自分の身体である。このような手段としての自分自身は「2.2.3 労働力と労働」で「労働力」として定義される。やがては「2.3.2.3 労働手段」で見えるように周りの自然が、そして『3. 社会と労働』で見えるように他の労働する個人との社会関係が、このような手段になる。

図 4 自分の意志への自分自身と周りの自然との従属



このように、労働する個人は、(1) 自分を対象と一体化させながらも、対象に埋没して自覚的主体性を失ってしまうのではなく自分を維持し続ける。たとえば、ハウレンソウの種子と同様に自分の労働も自分の意志の下にある物理的存在としては同列のものでありながら、ハウレンソウの種と自分の労働を絶えず支配しているのは自分の意志であ

り続け、ハウレンソウとは異なる自分を再生産し続ける。

それと同時にまた、労働する個人は、(2) 対象を自分と一体化させながらも、対象を喰らい尽くしてしまうのではなく再生産し続ける。たとえば、目の前に生えているハウレンソウを食うだけ食って荒野にしてしまうのではなく、絶えず自分が食べるハウレンソウを再生産し続ける。

このように、人間は、生産を行うあいだに、たとえ上手くいなくても、自分の意志でそれをやりとげる。逆に言うと、上手くいかなければ、自分の意志で生産をやめるということもできる。やりとげるのであろうと、やめるのであろうと、いずれにせよそういう決定を下すのは——たんなる本能ではなく——自分の意志なのである。つまり、人間は労働において試行錯誤して最適解を自ら、自分の意志で、追求することができる。

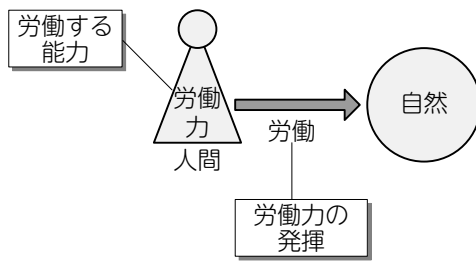
ほかの生物は進化の過程で環境に適応するだけである（適応できなかった個体は淘汰される）。これにたいして、人間は環境を自分に意図的に適応させる。

ほかの生物にとっては、自然の必然性（法則性）は運命であって、本能のおもむくまま、この運命に従って埋没したり、あるいは逆に逆らってしっぺ返しを受けたりする。これにたいして、人間は労働において自然の必然性を認識し（＝知識の産出）、この必然性に逆らうのではなく、自分の目的にとって都合がいいように自由自在に利用する（＝知識の応用）。言葉をかえて言うと、知識の応用としての人間の労働は理論の実践である。

2.2.3 労働力と労働

さて、労働そのものは、さまざまな肉体的・精神的な力の発揮であった。これらの肉体的・精神的な力は個人の身体の中にある。労働するために発揮される、個人の身体の中にある肉体的・精神的な諸力の総体を**労働力**（labor power）と呼ぶ。つまり、労働は労働力の発揮、労働力の支出である。

図 5 労働と労働力



さて、上では労働力は「労働するために発揮される、個人の身体の中にある肉体的・精神的な諸力の総体」として定義された。このような「肉体的・精神的な諸力」とはどういうものだろうか？ たとえば、手で上手にシャツを縫う能力が労働力の一環をなしているということは自明のことである。では、呼吸する能力はどうだろうか？ 呼吸する能力は、寝ている間も消費している間も、そして労働している間も発揮される。労働する個人は、呼吸によってシャツを縫うわけではないが、シャツを手で縫う際には必ず呼吸している。呼吸する能力はそれ自体としては自覚的な能力ではなく本能的な能力にすぎず、また労働している間だけではなく常に発揮されている能力だが、しかし自覚的な行為である労働に位置付けられ、その不可欠の構成部分をなしている。

したがって、このような「肉体的・精神的な諸力」の中で「労働するために発揮される」のではないものがあるかという、あまりない。また、あってもそれを区別してとりだすということはほとんど不可能であるし、無意味でもある。そうだとすると、労働の時だけに発揮されるのだろうと常に発揮されているのだろうと、およそ人間の中に眠っているありとあらゆる「肉体的・精神的な諸力の総体」を「労働するために発揮される」という観点から位置付けたのが労働力だということになる。自分の物理的運動を労働と位置付け、物理的対象を労働対象と位置付け、物理的手段を労働手段と位置付けたのが労働であったのと同様に、自分の能力を労働力と位置付けるのもまた労働、つまりこの能力の発揮のされ方である。呼吸する能力は寝ている間に発揮されている限りでは労働力では決まてないが、シャツを手で縫う際に発揮されている

限りでは労働力の構成部分をなす。

労働力があるということと実際に労働するということは全く別のことである。現代社会では、そのような力、そのような能力をもっている個人は「労働力人口」の一員としてカウントされる。しかし、労働力人口の一部分は完全失業者である。完全失業者は、一定期間の間、少なくとも金をもらう労働（＝賃労働）をしているわけではない。つまり、この例では、完全失業者は、金をもらう労働をする労働力をもっているが、金をもらう労働をしてはいない。

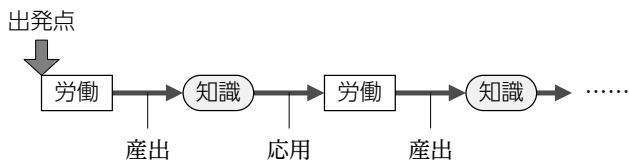
2.2.4 知識と労働

労働する個人が、生産と消費とを分離し、生産において労働を発揮して自分の意志で自覚的に行うようになると、何よりも先ず、(1) 知識を産出せざるをえない。なぜならば、正に労働が自覚的行為であって、寝ている間の呼吸のように無意識のうちに本能的に行っている行動ではないからである。そして、(2) ひとたび知識を産出してしまうと、この知識を前提して労働が行われ、効率化のためにこの知識を応用せざるをえない。なぜならば、『2.4 コストとしての労働』で見ると、労働は自覚的行為であって、コストとして減らさずにはいられないからである。

われわれは、労働のこの側面が、現代社会においては、単なる知識の適用（＝応用）ではなく、“科学的知識の意識的・計画的な適用”という形で、実現されているのを、後に『10. 労働生産力の上昇』で見る。

先ほどは、構想の実現において労働が意識の応用だということを強調したが、まずは労働は知識の産出である。労働先にありきで、知識を産出する。そして、自ら産出した知識を、構想の実現で見たように、応用していき、さらに新しい知識を産出して行くのである。

図 6 労働と知識との関係



動物でも、あっちの山には餌がたくさんあるぞ、この虫は食べられるぞ、というくらいは知ることができるだろう。しかし、自分が食べる（消費する）ホウレンソウを自分で栽培する（生産する）ようになると、すぐに、たとえば日陰に蒔いた種は育たない（その原理はともかく経験的には光合成の発見）ということを知るようにならざるをえない（知識の産出）。そして、ひとたびそのことを知ってしまうと、より多くの、そしてより美味しいホウレンソウを、より楽に生産するために、もはや日陰には種を蒔かなくなるだろう（知識の応用）。

2.2.5 補論：個人的労働の原理

ここで、個人的労働において現れている限りでの人間（＝労働する個人）と自然（＝対象）との関係をまとめておこう。

2.2.5.1 自由

第一に、労働する個人は労働を通じて自然法則——すなわち自然の必然性——を認識し、また労働においてこの知識を応用して、自分の目的に応じて上手いこと自然の必然性を利用している。たとえば、ホウレンソウの栽培を通じて光合成を認識し、またホウレン草の栽培においてこの知識を応用して日向に種をまいている。つまり、自然に反抗するのでもなく自然に埋没するのでもなく、自然を自由自在に取り扱っている。この意味では、労働する個人は自由な存在である。

動物もある意味では自由な存在だが、動物が自由であるのは理性や社会に縛られずに弱肉強食の世界にいるからである。要するに、動物の自由とは、個体の側から言うと、本能のおもむくまま勝手に生きて勝手に死ぬということである。すなわち、“野垂れ死に”する自由、食い食われる自由、殺し殺される自由である。環境の側から言うと、大自然の一部として大自然に埋没し、運命に従属し、大自

然と運命をともにするということである。すなわち、大自然が栄えれば自分も栄え、大自然が減れば自分も減る自由である。要するに、どちらの側から見ても、自然を自由に利用できない不自由な存在として生きる自由——不自由なままでいる自由——である。すなわち、^{ほうろう}放埒とか勝手気ままという意味での自由である。これにたいして、人間の自由とは、必然性の自覚的な実現である。自然を上手いこと使いこなす自由、野垂れ死にせずに済む自由である。

同様に、自然の必然性も、動物にとっては、それに逆らうなり、あきらめてそれを受け容れるなり、どっちにせよ、“運命、宿命、さだめ”である。これにたいして、人間にとっては、自然の必然性は、——決してどうにもできない運命ではなく、また、それに無謀に逆らってしっぺ返しをくらうのでも、それに流されて生きるのでもなく——、それを知識として獲得して自分の目的のために上手いこと利用するべきものである。

こういうわけで、自由についても必然性についても、その意味は動物と人間では全く逆である。

なお、『3. 労働と社会』で見ると、労働する個人は、自然に対してだけではなく、他の労働する個人に対しても、自由な存在としてふるまい、たがいに自由な存在として合意して社会を形成するということになる。それとともに、自然に対する上記の自由も、労働する個人は社会の中で実現するということになる。

2.2.5.2 同等性

第二に、労働する個人は自然に対して、自分が自然の一部であるのと同時に自然が自分の一部であるという形で、上手いこととりもっている。自然をほしのままに喰らい尽くしてしまう（たとえば餌を採り尽くしてしまう）のもなく、逆に大自然の暴威に喰らい尽くされてしまう（たとえば天候不順で餌が足りないから飢え死にしてしまう）のでもなく、自分と自然とを同等な存在としてどちらをも再生産している。たとえば、自分自身で生産したホウレンソウを食べて自分自身を再生産し、また——前期に生産したホウレンソウは今期に消費してしまったが——今期の生産の結果として次期に消費するホウレンソウを再生産し、そして次期

の生産のためのハウレンソウの種籾を再生産している。

人間は自然に対して主体としてふるまうということによって、自然に対して真の同等性を獲得している。一見すると、主体としてふるまうということは、同等であるということとは正反対であるように見えるかもしれない。しかし、完全に一体化して主客の区別がなくなってしまうと、同一になってしまい、もはや同等ではない。それは自然との同等性ではなく、自然への埋没である。そうではなく、自然と一体化しながらも自然と自分を区別しているという人間の労働のふるまいこそが自然に対する真の同等性を確立する。

なお、『3. 労働と社会』で見ると、労働する個人と自然とのあいだでの、すなわち主体と客体とのあいだでの同等性は、社会の中では労働する個人と労働する個人とのあいだでの、すなわち主体と主体とのあいだでの平等に帰結する。

2.2.5.3 自覚的な対象支配(または所有)

第三に、自然に対する労働する個人のこのような関係は自分自身の意志によって媒介されたものである。労働する個人は自然に対して、動物とは違って、単に物理的にマーキングするだけでなく、“これは私のものだ”と自分の意志で高らかに宣言している。今や自然対象と自分との関係は必然的である。と言うのも、たまたまそこにあった領域にマーキングするのではなく、労働する個人は自分で創造した世界を持つからである。すなわち、自分で、自分の意志で生産したものなのだから、自分のものだという必然性が生まれる。

私が生産したハウレンソウは天から降ってきたのでもなければ、雑草のごとくたまたま偶然にそこに成っていたのでもない。私が自分の世界の一部として自分の意志で創造したものである。こういうわけで、私と私が生産したハウレンソウの間には、私の意志と行為とを媒介にした、つまり労働を媒介にした必然的な関連(たまたまではない関連)がある。

ただし、『3. 労働と社会』で見ると、このような、労働する個人と対象(すなわち自然)とのあいだ

での、意志を通じた関係は、社会の中では、所有関係として、他の社会構成メンバーとの間での相互的承認によって確証されるということになる。

このような、自覚的な——意志によって媒介された——対象支配は労働そのものとは違う。労働している間も労働していないときも、私が開墾した土地に対して私は“これは私のものだ”という意志のもとにふるまっている。だから、このような自分の意志による対象支配は労働している間も労働していないとき(たとえば寝ている間)も消えないのである。

もちろん、寝ている間も自分の意志を表明するためには、動物のマーキングと同様に、物理的な表現(名札を付けるとか柵で囲うとか)が必要である場合もあるだろう。しかし、名札を付けているから自分のものになるのではなく、自分のものだからこそ(それをはっきりさせるために)名札を付けるのである。実際には、もし社会的な承認があれば、つまりもし他の社会メンバーが“この土地はAさんの個人的なものだ”ということを確認していれば、柵で囲わなくても誰もその土地を奪ったりはしないのである。

労働によって人間は意志を確立するのだから、自覚的な対象支配は、なによりもまず、労働の結果として、労働の生産物に対する対象支配として、成立する。しかしまた、生産物の一部分は再び生産手段として、労働過程の中にはいつていく。たとえば、開墾された土地は生産手段として農業に前提される。こうして、ひとたび労働の結果として成立すると、自覚的な対象支配は、労働の前提として、生産手段に対する対象支配として、位置付けられるようになる。

2.2.5.4 これら三つの原理の相互関係

これら三つの原理の中で、自由の原理こそが根本原理である。自由の原理から、同等性の原理も自覚的な対象支配の原理も生まれる。自然に対して自由にふるまっているからこそ、自然を自由自在に自分の延長にしているのであり、したがって自然との同等性を獲得している。また自然に対して自由にふるまっているからこそ、自然を自分の意志の領域にしているのであり、

したがって自然を自覚的に支配している。

それでは、今度は、このような労働にどのような契機があるのか、考えてみよう。

2.3 労働過程

2.3.1 過程としての労働

すでに見たように、労働する個人は、労働によって、自己と対象とを——人間と自然とを——上手いこと媒介し、統一している。逆に言うと、労働は、労働そのものだけでは完結せず、なんらかの自然対象に対して関係づけを行っている。

なお、ここで言う自然には、人間以外の自然だけではなく、人間という自然——つまり人間の身体——も含まれるし、人間という自然にはこの労働する個人自身の身体だけではなく、他の個人の身体も含まれる。たとえば、医療労働や教育労働は他の個人の身体に対する働きかけである。

だから、労働は、労働そのものという契機（自己自身という契機）だけではなく、自己の対象になる諸契機を含んでいる。労働を含むこれらすべての諸契機の統一が過程としての労働、すなわち**労働過程**（labor process）である。

2.3.2 労働過程の対象的な諸契機

2.3.2.1 はじめに

言うまでもなく、労働過程の第一の契機は労働過程の主體的な契機、すなわち労働自身である。ここでは、労働過程の対象的な契機すなわち客體的な諸契機を考察する。労働は、一方では自分自身を含む諸契機を統一する運動であり、他方では（単なる物理的な運動としては）他の諸契機（すなわちその諸対象）と並ぶ一契機でもある。統一する運動としての労働はその諸対象を、(1) 対象そのもの（＝労働対象）、(2) 労働手段、(3) 補助材料というように、区別して意味づけしている。

2.3.2.2 労働対象

最も単純なモデルを考えてみよう。自分と、自分のまわりの自然がある。

自然を手つかずの自然だけを含むと考えてはなら

ない。ここで言う自然とは労働において自分の周りにある一切のものであり、たとえば先ほどの大工仕事でいうと、カンナや釘もこの意味では自分の周りの自然である。

ここで、自分の精神的・肉体的な力の発揮が労働である。筋肉の運動とか、大脳皮質の運動とかである。自分のまわりの自然が**労働対象**（objects of labor）である。

注意していただきたいのは、自然を労働対象にするのは、その自然の素材的な性質ではなく、もっぱら労働の働きだけだということである。たとえば、私が目の前にある土地を宅地として整地するというケースを考えてみよう。この場合、たとえ 100 キロかなたにある山の土と目の前の土とが全く同じ構成部分をもつ土だったとしても、100 キロかなたにある山の土は私の労働の対象ではない（他のだれかの労働対象になっているかもしれないが）。労働対象なるものが自然界にあるというのではなく、労働が行われることによって自然が労働対象になるのである。

労働対象の中には、漁業における水、鉱山業における鉱石など労働の生産物ではなく天然に存在しているものもある。これにたいして、シャツ生産における綿布のように、それ自身、労働の生産物であるような労働対象は**原料**（raw material）と呼ばれる。

2.3.2.3 労働手段

人間は、労働において、自分の目的を達成するために、自分の身体のありとあらゆる器官を用いる。これは労働が自分の身体を手段として扱っているということである。このように、労働という制御・統一の運動は、その目的を実現するために、自分の身体を手段とする。たとえば、シャツの生産において自分の労働の手段と

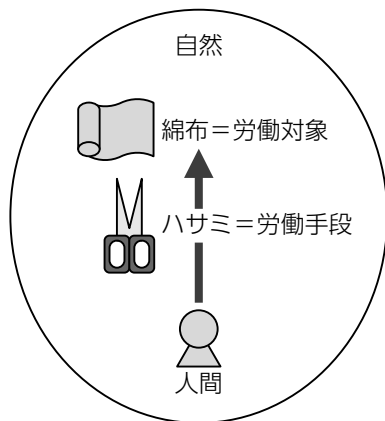
して自分の手を使って綿布をビリビリと裁断する。

ところがまた、労働が自分の手段とすることができるとはなにも自分の身体だけではない。対象そのものから、自分の身体のように対象に働きかける手段を手に入れることができるわけである。たとえば、綿布の裁断において、自分の手を使うよりもハサミを使う方がよほど楽に、そしてよほど綺麗に裁断することができる。

このように、労働は自分のまわりの自然の一部を、自分と対象とのあいだに割り込ませて、“手段”として活用することができる。このような手段を**労働手段** (means of labor) と呼ぶ。

たとえば、シャツの生産においては、綿布は労働対象である。綿布は裁断されてシャツになる。これにたいして、ハサミは労働手段である。人間はハサミを通じて綿布を裁断する。

図 7 シャツ生産における労働対象と労働手段



ここでもやはり、自然に“労働手段”という性格を与える——つまり労働手段を労働対象から区別する——のは、もっぱら労働の役割である。たとえば、全く同じ牛でも、田畑を耕す手段として使えば労働手段になるし、ミルクを絞る対象として使えば労働対象になる。

これまでにでてきたことをまとめておこう。——(1)「2.2.2 力の自覚的な制御・統一」において、手を上げるといふ、寝ているあいだでも(つまり労働としてでなくても)行なわれるような、肉体的・精神的な力の発揮としての物理的な運動に、「これ

は労働だ」と特徴付けたのは、自分自身で自覚的に岩をどけるという“自分の行為”としての労働(この場合には道路整地労働)だった。(2)「2.2.3 労働力と労働」において、自分の身体の中にある肉体的・精神的な能力の総体に「これは労働力だ」と特徴付けるのも、“自分の行為”としての労働であった。(3)「2.3.2.2 労働対象」において、単なる自分のまわりの自然にすぎない土地に、「これは宅地という労働対象だ」と特徴付けたのも、“自分の行為”としての労働(この場合には宅地整地労働)だった。そして今や、(4)「2.3.2.3 労働手段」において自分のまわりの自然である牛を、乳牛という労働対象から区別して、「これは耕牛という労働手段だ」と特徴付けるのも、“自分の行為”としての労働(この場合には農耕労働)である。

労働手段の使用によって——したがってまた労働手段の発明・改良によって——、コストとしての労働が飛躍的に減少する。労働がコストであり、また労働それ自身がこのコストを減らす活動であるからこそ、これまでの歴史において、人間は他の動物とは違って、実に多様で高度な労働手段を生み出してきたのである。

労働手段の中にも、労働の媒介なくして天然に存在しているものがある。たとえば、原始的な農業を考えると、土地は作物を栽培するための天然の労働手段である(ただし、今日の農業では、土壌は多かれ少なかれ排水・土壌改良などによる労働生産物である)。しかしながら、効率的運営を追求するために割り込ませるといふ労働手段の性格からして、人間はどんどん新しい労働手段を発明するのであり、したがって主要な労働手段はそれ自体、労働生産物である。このような、それ自身、労働生産物であるような労働手段には、道具、機械などがあり、また、個々の道具・機械が設置される建物・交通手段(道路等)などがある。ただし、道具と機械の問題は生産力の上昇の問題として、『10. 労働生産力の上昇』で詳しく考察することにしよう。

2.3.2.4 補助材料

本来の労働対象は、たとえば綿布がシャツの主要な物質的構成要素として再現するように、生産物の主要材料として用いられる。これにたいして、対象自身が生産物に再現せずに手段として使われることもある。こ

れを**補助材料**と呼ぶ。補助材料は労働対象と労働手段との中間的性格を持っている。

補助材料には、以下のものがある。——(1)労働手段の働きを助けるための手段(たとえば、労働手段としての自動車にとってのガソリン)。(2)労働対象の変化を引き起こすための手段(たとえば、労働対象としてのハウレンソウの成長を助けるための肥料)。(3)労働そのものの遂行を助けるための手段(たとえば、オフィスの照明のための電気)。

労働過程において、労働は、単なる肉体的・精神的な力の発揮としては、すなわち単なる物理的運動としては、物理的対象としての労働対象、物理的手段としての労働手段と並んでいる。だが、同時にまた、労働は自分の行為、ありとあらゆるものを自分のものとして位置付けるような行為であり、肉体的・精神的な力の発揮としての物理的な運動はこのような“自分の行為”であるということによって初めて労働たりうる。

この“自分の行為”という面から見ると、労働は、

労働過程のこれらの諸契機——労働、労働対象、労働手段、補助材料——を統一する運動でもある。と言うのも、たとえば、(1)シャキシャキと綿布を裁断する手の動きを(飼い猫をモフモフして楽しむのではなく)労働にするのも、(2)綿布を(ゴミではなく)労働対象にするのも、(3)ハサミを(飾り物ではなく)労働手段にするのも、——すべて同じ一つの、“自分の行為”としての労働(この場合には裁断労働)だからである。労働は労働過程のこれらの諸契機を区別するのと同時に、統一してもいる。

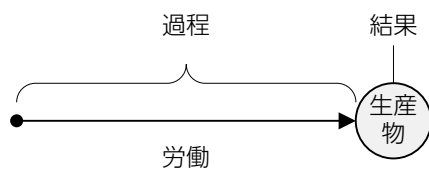
あるいはまた、こうも言える。——労働は、耕地労働と搾乳労働とが異なる労働であるということによって、同じ牛を労働手段と労働対象とに区別した。今度は、労働は、シャツを生産する同じ一つの労働であるということによって、綿布とハサミとを統一している。すなわち、綿布もハサミも、同じ一つの労働過程——シャツを生産する労働過程——の二契機である。

今度は、労働の過程を労働の結果との関連で考察してみよう。

2.4 コストとしての労働

2.4.1 労働過程と生産過程

過程を進みつつある労働が終了すると、すでになんらかの生産物が生産されている。労働する個人が労働を行ったのは、ゲームのような消費における自覚的行為とは違って、それをして楽しむためにではない(労働は時に結果として楽しみにもなるが、しかし楽しみを目的として行なわれるわけではない)。そうではなく、一定の結果、つまり一定種類で一定分量の生産物を獲得するためにである。すなわち、**生産物**(product)こそはこの労働の過程の結果である。



日本語で「生産物」と言うと、どうしても有体物(tangible thing)を思い浮かべてしまうが、英語で言うと product である。物体になっているかどうかは問題ではない。有体物ではない電気も、発電所で生産される限りでは、労働の生産物である。また、岩の移動の場合には、この移動そのものが労働の生産物である。

労働過程は生産物を生産する過程としては**生産過程**(production process)と呼ばれる。

労働を主体的な運動(すなわち労働自身を含む諸契機を統一する運動、自分の運動)として、つまり自分の運動として捉えてみよう(そして、「労働過程」という言葉の中の「労働」とはまさにそのような主体的運動である)。それならば、たとえ夜間の

無人のコンピューターームでも、コンピュータが稼働している限りでは、労働過程が継続していると言える。何故ならば、実際の物理的・客体的な労働が行なわれなくても、過程を主体的に運営しているのはやはり労働である——コンピュータに命令を与えておいたのは労働であり、コンピュータはこの命令に応じて処理をしている——からだ。AI化が進んでも、話は同じだ。“最初の一撃”を与えたのは労働なのだ。その限りでは、労働過程と生産過程との間に時間的な違いはない。

しかしまた、この場合の労働を単なる物理的・客体的な運動（すなわち労働過程の他の契機と並ぶ一契機としての労働）として、つまり自分に従う運動として捉えてみよう。それならば、実際に労働している時間は生産が行なわれている（すなわち生産物が生産されている）時間の一部に過ぎない。たとえば、ぶどう酒の製造において、発酵は24時間続いているのであるのにならして、実際に労働する個人がこの発酵を管理する労働を行っているのはその一部——たとえば8時間程度——である。この人は365日24時間、発酵樽に付きっきりになっているわけではない。この問題は『8. 資本の循環・回転』において、生産期間と労働期間との違いとして考察することになる。

過程の結果である生産物という観点から見ると、労働手段と労働対象と補助材料との違いは意味がなくなる。

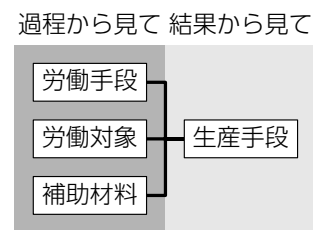
たとえば、シャツ生産の結果は、ただの綿布でもハサミでもなく、シャツである。綿布とハサミが使われた——したがって綿布とハサミとの違いが意味をもった——のは労働過程の中だけである。結果である生産物＝シャツにとっては、綿布もハサミも、それを生産するのに使われたということでは同じである。要するに、過程の中をながめると労働対象と労働手段との違いが意味をもち、結果をながめると労働対象と労働手段との違いは無意味になるわけである。そもそも労働手段と労働対象とを区別したのは、有用なものとしての性質ではなく、もっぱら労働の働きであったということを思い出して欲しい。補助材料についても話は同じである。

それと同時に、過程の中で意味を持った労働の

主体性も生産物という結果においては消え去っている。あるのは、シャツだけであって、シャツには、なんとか綿布の痕跡は残っているが、ハサミなんかは全く見えないし、労働もどんなやり方の労働がどんな巧みさで行われたのかということは見えてこない。

そこで、過程の結果である生産物の観点から見ると、労働対象と労働手段と補助材料とは一括される。労働手段と労働対象と補助材料とを一括して、どれも、生産物を生産するのに使われた手段、すなわち**生産手段** (means of production) と呼ばれる。

図 8 労働手段+労働対象+補助材料=生産手段



同じく、過程の結果である生産物という観点から見ると、労働も、生産物を生産するのに役に立った労働、すなわち**生産的労働** (productive labor) と呼ばれる。

ここでは全く考慮に入らないが、現代社会では、有用なものとしての生産物の生産に直接的あるいは間接的に関わりない、純粹な商業労働（商品・貨幣の取り扱い）が必要不可欠なものとして社会的な役割を担っている。たとえば、コンビニでおにぎりを買う場合、コンビニ店員がレジ打ちしてお金を受け取り、お釣りを支払う労働は、それによっておにぎりの品質が良くなったり、おにぎりが増えたり、おにぎりが消費者であるお客さんの手に物理的に移動したりはしないような労働である。つまり、有用なものとしてのおにぎりには関係せず、ただ価値としてのおにぎり（ただおにぎりの価格の実現にのみ）関係するような労働である。けれども、このような労働がなければ、市場のメカニズムは機能しない。のちにわれわれはこのような労働について『15. 商業資本と商業利潤』で取り扱う。

さらに、労働する個人は、労働過程の結果として、今までに生産物を生産した者であり、今ではこの生産物を所持している者であるという意味では、**生産者** (producer) と呼ばれる。

どの人類社会にも共通な経済活動を考察しているここではまだ、労働する個人と生産者とは同じ人物である。しかし、現代社会では、両者が違ってくる。たとえば、自動車生産において、自分の私的所有物を用いて自動車を生産し、その結果として完成した自動車を私的に所有しているのは、つまり自動車の生産者は、実際に工場の中で労働している従業員ではなく、法人としての自動車メーカーである。

2.4.2 生産物の二側面と労働

2.4.2.1 有用なものとしての生産物

一面では、労働の生産物は、——生産物ではない大気と同じく、そして無用なゴミとは違って——、人間の欲望を満たす有用なものである。

たとえば、生産物がシャツである場合には、それを着るということによって、シャツは消費過程に入り、この個人の欲望を直接的に満たす。あるいは、生産物がシャツを生産するために必要なハサミである場合には、再びこのハサミはシャツの生産過程に入り、シャツを生産するという欲望を満たし、それを通じてまたシャツを消費するという欲望を満たすことになる。

なお、ここでは、個人的な労働過程を想定しているということに留意して欲しい。『3. 社会と労働』で見ると、社会的な労働過程を想定する場合には、生産物の生産者と、それを欲する消費者とは異なるようになる。

労働は、この種類の、この品質の、この分量の、有用な生産物を生産した。労働は、適切に糸や布や針やハサミを選んで、適切にそれらの生産手段を使って、適切に手を動かして、ハウレンソウではなくシャツを、とても着られないボロボロのシャツっぽいゴミではなく格好いいシャツを、2着のシャツではなく3着のシャツを、生産した。生産物がゴミではなく、有用なも

のであるのは、労働が、無用で無駄・無意味な活動ではなく、目的として目指したとおりの有用な効果をもたらすような、すなわち有用な労働だったからである。

有用なものとして見る限り、生産物は労働による労働 (=生産的労働) と自然 (=生産手段) との結合の結果である。

この場合の自然にはコストがかかった生産手段も、全くコストがかからない生産手段も含まれる。たとえば、トマトの成長に光合成が必要である限りでは、光と二酸化炭素とが必要である。トマトが光を日光から、二酸化炭素を大気から取っている限りでは、露地物のトマトの栽培では、それらの生産手段(つまり日光と大気)には全くコストがかかっていない。

とは言っても、生産手段としての自然がコストがかかった生産物であるのか、それとも全くコストがかかっていない天然物なのか、——このような問題は生産方法に依存する。たとえば、光をLED照明から、また二酸化炭素を石油精製の副産物としての液化炭酸ガスから利用する限りでは、スマートアグリでは、光や二酸化炭素という生産手段はコストがかかった労働生産物である。

2.4.2.2 コストがかかったものとしての生産物

他面では、労働の生産物の生産物たる所以は、——労働の生産物ではない大気とは違って——、この有用なものを手に入れるのにコストがかかったということにある。シャツは自然発生して空中に浮いているのではない。この品質のこの分量のシャツを生産するためには、労働を費やす必要があった。すなわち、労働するという一定のコストがかかった。その限りでは、労働はコストであった。

「コスト」というのは日本語に訳すと「費用」である。要するに、ここでわれわれは費用のことを問題にしているのである。それならば普通に日本語で「費用」と言えばいいし、実際にまたわれわれは後で資本主義的営利企業について「費用」という用語を用いる。

けれども、第一に、「費用」と言うと、どうしても価格表示での費用を思い浮かべてしまう。とこ

ろが実際には、「〇〇円の費用」は、わざわざ費やしたものであり、この費やしたものは結局のところ労働を費やしたということに帰着する。そして、ここでは、価格表示される前のコストを考えているのであり、それこそがどの人類社会にも共通なコストなのである。

第二に、資本主義的営利企業の観点からは、すなわちカネモウケという観点からは、「費用」とは収益(=売上高)から利益(=利潤)を引いたものであり、要するにこのような「費用」からはモウケの分が除かれている。つまり、資本主義的営利企業の観点からは、費用とは、——“生産のために費やしたもの”ではなく——“モウケのために費やしたもの”のことであり、原価のことである。ところが実際には、社会的な観点からは利益分も社会がその生産物の生産のために費やしたものである。われわれがコンビニで100円のおにぎりを買うとき、資本主義的営利企業にとってはたとえば60円分が40円のモウケのために費やしたもの(=原価)であるかもしれないが、われわれにとってはおにぎりを手に入れるためにわれわれは100円分を費やしているのであり、社会にとっても社会全体がその年に費やした総コストの中で100円分がこのおにぎりに割り当てられているのである。

こういうわけで、どの人類社会にも共通な経済活動を考えているここでは、われわれは「費用」のことを「コスト」と呼んでおくことにしよう。

第一に、すでに見たように、労働は、本能的な活動とは違った自覚的な行為(本能的な活動の自覚的な実現)であり、自らの意志のもとにわざわざ意図的にやる行為であった。

パンの生産を考えてみよう。パンは空中から手品のように発生するものでもなければ、寝ている間にいつの間にか、それをつくりたいと思わなかったのに焼き上がっているというものでもない。そうではなく、自覚的に、すなわち、はっきりとパンを作ろうという意志を持って、焼き上がったうまそうなパンの姿をイメージしてから生産するものである。このように、パンの生産は、私が私の意思でわざわざ、意図的に、故意に行うものである。

これにたいして、たとえば、単なる本能的な生命

活動の一例として、心筋の活動を考えてみよう。寝ている間も、自分の意思に関わりなく、本能的に、心筋は活動している。わざわざやっているのではないのだから、そのような活動をわれわれはコストだなんて考えたりはしない。心筋を動かすのに、私には、特に苦勞もいらぬし、逆に喜びもない。また、——そもそもそういう気持ちにはならないだろうが——“心筋が動いているとカロリーが消費されて不経済だから、せめて寝ている間くらいはいいそのこと心臓を止めてしまう”というわけにもいかない。つまり、われわれは心筋の活動を、コストとして意識しないし、コストとして減らせもしない。

第二に、労働は、——生産物という目的の達成のためにすべてを手段にする合理的な行為すなわち目的に適合した行為ではあるが——、この生産物の消費は労働の外にあった。労働は、消費から区別された生産的労働であった。労働は物質代謝(あるいは生命活動、生活)の媒介であって、この物質代謝は消費によって完結する必要があった。要するに、労働は、——過程の内部を見ると自己目的であるが——、物質代謝という生命の自己目的を達成するための手段であった。

およそ生命活動(したがって物質代謝)というものは客観的に合理的な活動(この場合には客観的な目的に適合した活動)であり、自己目的である。どの生物も、“生きる”という客観的な目的のために、すべて——光とか酸素とか水とか巣とか餌とか自分が属する群とか自分の交尾相手とか自分の一部とか——を手段にしている。労働過程の観点から見ると、または同じことだが労働による物質代謝の媒介という観点から見ると、労働も、生命活動の一環である以上、当然にそのような、客観的に合理的な活動であり、自己目的である。

しかしまた、生産過程の観点から見ると、つまり生産物という観点から見ると、または同じことだが生産-消費という物質代謝の全体という観点から見ると、労働にとっては、たとえばパンの生産の場合には直接的に——またたとえば小麦粉の生産の場合にはパンの生産を通じて間接的に——パンという生産物の消費が目的として設定されてい

る。この観点から見ると、パンを生産する労働も小麦粉を生産する労働も手段にすぎない。つまり、生産物の生産そのものは生産物の消費のための手段にすぎない。もし仮に“できあがったパンの品質も分量も重要じゃない。パンを焼き上げるということ自体が楽しいんだ。私は美味しいパンをたっぷり食べるためにパンを焼いたんじゃない。パンを焼くのが楽しいから、パン焼きを楽しむために、パンを焼いたんだ。正直、できあがったパンなんて捨てちゃった”としたら、パン焼きは生産的な労働ではなく、消費になってしまう。だが、実際にはそうではない。パン焼きは、それ自体を楽しむためという目的のためにではなく、パンという生産物を手に入れるという目的のために、やられるものだ。

これにたいして、たとえば食事やゲームを行うという形での消費は本能的であるのと同時に自覚的でもある。それは、空気の消費が筋肉の運動——これも一種の消費なのだが——と同様に全く無自覚的・本能的であったのとは、違っている。しかし、このような自覚的な消費はわざわざやるものではない。そうではなく、それを楽しむということ自体を目的にしている（食事がまずくてムカついたとか、ゲームに負けて悔しかったとかは問題ではない。楽しむということを目的にしていたということに変わりはない）。そうである限り、このような自覚的な消費はコストにはならない。『1. はじめに』で見たように、このような消費は好きなように楽しめばいいものである。スローフードってことでゆっくりと味わって食べてもいいものであり、要するに非効率的に食べてもいいものである。

もう一つの例として、パンの生産とプラモデルの生産を較べてみよう。プラモデルもまた、パンと同様に、生産された後に消費されるだろう。——それを組み立てたものが鑑賞するとか、手に取って遊ぶとかが消費である（ここでは、組み立てた者と組立済みのそれを鑑賞する者が別人だと想定していない。もし両者が別人ならば、プラモデルの組立はパン焼きと同様にコストになる）。

けれども、プラモデルの組立は、それを楽しむということその目的としている。それは、それ自体が遊びであり、消費である。つまり、それは、自覚的な生産であるのと同時に自覚的な消費でもある。組み立てられたプラモデルの鑑賞が消費であるだ

けではなく、プラモデルの組立（＝生産）それ自体が消費になる。そうである限り、この組立はコストにならないかもしれない（実際に、この組立がコストになるのかどうかは、生産の性格が強いのか、それとも消費の性格が強いのかに依存する。たとえば、自分で鑑賞するための同じ型のプラモデルを何度も組み立てる場合には、どうやったら効率的に組み立てるのか、考えるだろう。この場合には、生産の性格が強いのであって、プラモデルの組立はコストになっている）。

それでは、生産と同時に消費が行なわれる場合にはコストにならないのか？ そういうわけでもない。この『2. 人間と労働』では個人的労働だけを考えているが、『3. 社会と労働』で見えるような社会的労働を考えると、対人サービスでは生産と消費とは同時に行なわれる。たとえば、大学の講義を考えてみよう。教員が講義するのが講義の生産である。講義は教員によって生産されるその瞬間に学生によって消費される。しかし、この場合には、講義の生産者（＝教員）と講義の消費者（＝学生）とは別人であり、区別されている。この場合には、教員による講義は、プラモデルの組立とは違って、コストになる。要するに、教員は自分で消費して楽しむという目的のために講義を行っているわけではない。——結果的に楽しくなるということはあっても。

以上、(1) わざわざやるものであり、しかも(2) それ自身は媒介＝手段であるという 2 つの理由によって、労働は (a) コストになり、(b) コストとして意識される。そして、労働は、自覚的な行為であるというそれ自身の性格によって、(c) コストとして減らされうる。それでは、コストをなす労働はどういう労働なのだろうか？

労働する個人は、たとえば、一日のうちに、調理をし、掃除をし、野菜の栽培をする。この場合に、自分の欲望に応じて、つまり必要とされる有用なものとしての生産物の質と量に応じて、調理・掃除・栽培のそれぞれに時間を割り振る。掃除を楽しむためにやるのであれば、一日中掃除をしていてもいいのだが、そういうわけにはいかない。昨日よりもたくさん食べたい場合には調理に時間をより多く割り当て、昨日より

も掃除が上手になった場合には掃除に時間をより少なく割り当てる。この場合、調理にはより多くのコストになり、掃除はより少ないコストになる。

実際には、トータルコストについては、今日行う労働時間だけではなく、生産手段のコストを計算に入れなければならない。この問題は、以下の「2.4.4 新労働と旧労働」で取り扱われる。

労働する個人は、今日一日に費やすコストを、さまざまな欲望を満たすために割り当てている。掃除労働も調理労働も栽培労働も、わざわざやった労働であるという点では、同じくコストであり、労働時間に応じて比較可能である。

畑を耕すために牛に犁を牽かせる場合の牛の運動、トラクターに犁を牽かせる場合のトラクターの運動は私にとってのコストではない。それは私がわざわざやっている労働ではなく、私がわざわざやっている労働の一環として自由自在に制御しているものである。

ただし、牛の飼育に費やした労働やトラクターの製造に費やした労働はコストになる。この問題は、以下の「2.4.4 新労働と旧労働」で取り扱われる。

これにたいして、私にとって労働がコストであるのは、どの労働も同じ私という人間がわざわざ行ったものだからである。私という同じ人間の人的労働力の支出だからである。すなわち、それがどういう有用な仕方でも支出されるのか、すなわち、掃除という仕方か、それとも調理という仕方か、それとも栽培という仕方か、ということに関わりなく、人間が持っており、人間以外には持っていない能力を生産物という目的のためにわざわざ発揮したということだからである。一言で言うと、人間的な労働だからである。

ここでは、個人的労働だけを考えているから、一日の労働時間を様々な種類の有用な労働に割り振る上で、どの有用な労働も——掃除も調理も栽培も——私という同じ人間がわざわざ意図的にやっている人間独自の生命活動の媒介であるということに、すなわち人間の労働力の支出であるというこ

とに、すなわちまた人間的労働であるということに、変わりはないということになった。『3. 社会と労働』で見ると、社会的労働を考えると、社会的分業においてどの個人の労働も、掃除人の掃除労働も料理人の調理労働も農民の栽培労働も、わざわざ意図的にやっている人間独自の生命活動の媒介であるということに、すなわち人間の労働力の支出であるということに、すなわちまた人間的労働であるということに、変わりはないということになる。

コストというのは嫌々やっているということか？

“故意でわざわざ行うからコストだ”ということとは、“嫌々行うからコストだ”ということとは決してない。現代社会においては、労働は一面では嫌なもの、やるのが死ぬほど苦痛なものとして過度に貶められており、他面ではこんなに素晴らしいことはないというように過度に美化されており、どちらのイメージもてんでバラバラに存在している。しかし、これは現代社会における労働の特有な社会的形態——一言で言うと賃労働——から生じる。ところが実際には、労働は人間における正常な生命活動の一環（つまり人間と自然との間での物質代謝の媒介）でしかない。

どの人類社会にも共通なレベルで考える限りでは、一面では、労働は苦しみである。たとえば自宅の中で時間があるときに自分の労働で美味しい料理を作るということを想像してみよう。どうやったら美味しくなるのか、どうやったら楽になるのか、苦悩する。およそ創造というのはそのような産みの苦しみなのである。しかし、他面では、労働は楽しみである。産みの苦しみを乗り越えて美味しい料理ができあがったとしたら、——もちろん生産物が消費されて楽しめるが、しかしまたそれだけではなく——、こういう工夫をした、これはうまくやったという労働そのものが自己目的として楽しみになる。およそ創造というのはそのような達成の楽しみなのである。

このように、正常な生命活動の一環としては、労働は、苦しみであるのと同時に楽しみでもある。しかもまた、労働は、苦しむためにやるものでも、楽しむためにやるものでもない。

2.4.2.3 物質代謝の効率的運営

こうして、一方では、人間と自然との間での広い意味での物質代謝（つまり人間生活）にとって有用なものだから、手に入れたいから、私は生産物を手に入れよ

うとした。他方では、この生産物を手に入れるという目的のためには、私はわざわざ労働というコストをかけなければならなかった。そして、できるだけこのコストを減らすということ、——最小のインプットで、量的に見て最大の、また質的に見て最高のアウトプットを達成するという——を私は追求せざるをえない。

自然（小麦、イースト菌、塩、水など）から生産されたパンは、やがて消費されるだろう。すなわち、咀嚼されて消化されて排泄されるだろう。この物質代謝の活動において、パンの生産は、コストを減らして効率的に行うべきものであり、実際にまた行ういうものである。こうしてまた、私は、パン生産の労働を通じて、自分自身の物質代謝の活動をコントロールし、効率的に実現していることになる。これが物質代謝の効率的運営である。

すでに見たように、どの人類社会にも共通な経済活動のレベルでは、労働過程と生産過程との違いは、労働という自分の運動として把握されるのか、それとも生産物という結果の観点から把握されるのかという違いでしかない。

しかし、現代社会では、有用なものとしての生産物と、コストがかかったものとしての生産物とが、商品と貨幣との関係の中では、有用なものを代表する商品と、価値を代表する貨幣という形で別々に独立してくるようになる。それをもたらすのは、そもそも労働過程に含まれていたコストという側面が“価値”という形で自己目的化し、有用なものとの生産という側面から独立するようになるということだ。現代社会では、いまや、有用なものを生産するのは、単に価値を手に入れるという目的を達成するためにすぎない手段になる。つまり、シャツという有用なものを生産するのは、それを売ってより多くの価値、つまりより多くの貨幣を手に入れるという目的を達成するためにすぎない手段になる。

自然破壊や人間破壊は？

労働が効率化の活動である限り、どんどん効率的に自然を利用していけば、あるていどまでは自然が破壊されるのは当然である。他の動物が自然を喰らい尽くして終わ

りであるのに対して、人間は自然を再生産する。人間は土を使って、しかし土の栄養分を喰らい尽くして終わりではなく、ハウレンソウという形で自然を再生産する。だが、だからと言って、ハウレン草の生産に使われた土の栄養分が元通りになっているとは限らない。自然の再生産を完成するためには、ハウレンソウを生産するだけでなく、ハウレン草の生産とは別に、ハウレン草の生産で使われた栄養分を補填しなければならない。もし補填されないならば、土地の自然破壊が起こる。

同様にまた、誰に命令されたのでもなく自分の好きでやる労働であっても、やり過ぎれば過労になる。労働が労働力の支出である限り、必ずや労働力を疲弊させる。たとえば、手が疲れる、頭が疲れる、など。もちろん、労働による効率化は効果に較べてこの疲弊を減らすのだが、労働する限り労働力が疲弊するのは当然である。労働が物質代謝の効率的運営である限り、これらのことはどの社会にも、つまり前近代的共同体にも現代社会にも未来社会にも、当てはまる。すなわち、労働による自然破壊と人間破壊との可能性は常に存在する。

しかし、他の条件を考慮しなければ、破壊した自然や破壊した健康は回復されなければならない。外部コストをかけて回復される場合には、効率化という観点からは、投入すべきコストにこのような回復コストを加算しなければならない。たとえば、有害物質で土地が汚染された場合には、有害物質を除去したり封じ込めたりするコストがかかるし、労災で労働者が怪我をした場合には、治療するコストがかかる。また、自然な回復に任せる場合には、その間は、疲弊した自然や労働力は使えない。だから、効率化の利益よりも回復コストの方が上回ってしまうというのは、あるいはそれどころか回復不可能なまでに自然や人間（労働力）を破壊してしまうというのは、もはや効率化に反しており、それゆえに労働の失敗であり、それゆえにまた経済活動の失敗でもある。

こういうわけで、われわれがここで考察している労働の一般的な原理から見ると、むしろ、効率化が進めば進むほど、したがって労働が発展すれば発展するほど、ますます人間の制御能力が高まり、ますます自然破壊と人間破壊とを回避できるはずである。同様にまた、自覚的に自然を制御するという一般的な原理は制御できないような力は自覚的に放棄するという、使えるものと使えないものとを区別し選択するということを意味する。

ところが実際には、どうなっているだろうか。現代資本主義社会の歴史的な使命は社会の生産力水準の上昇である。しかし、まさにこの現代資本主義社会において、人類の未来に悲観をもたらすほどに自然破壊と人間破壊とが進んでいる。また、まだ十分に制御できていないエネルギーに手を出してしっぺ返しをくらっている。さらに、労働を楽にする機械設備の発明は、情報化の進展は、かえって長時間の過酷な労働を労働者に強いている。

このような問題は、すべて労働の一般的原理から直接に生じるのではなく、その特定の社会的・歴史的なあり方から、一言で言うと資本主義の営利追求のメカニズムから生じる。資本主義的な私企業は激しい競争の圧力の中で私的利益を追求し、その手段として人間も自然も搾取し尽くそうとする。しかし、その際に生じる人間破壊と自然破壊とのコストは私的に負担するのではなく、社会に押しつけようとする。このメカニズムを解明していくのが資本主義としての現代社会の経済活動を考察する際の課題である。

2.4.3 具体的労働と抽象的労働

労働には、具体的側面と抽象的側面とがある。一日にいくつかの種類の労働を行うことを考えてみよう。たとえば、今日は塀をつくり、また花瓶をつくと仮定しよう。この場合に、塀をつくる労働と花瓶をつくる労働とは全く違う労働であり、そのような労働の違いが——生産手段の違いといっしょになって——生産物の違いとして現れている。同様にまた、同じく花瓶を作る労働と言っても、経験豊かで才能に溢れた職人の労働は、そうではない職人の労働よりも、より高い品質の花瓶を生産できるか、同じ時間により多くの花瓶を生産できるか、あるいはその両方だろう。この場合にも、やはり、経験豊かで才能に溢れた職人の労働は、——たとえば手がより正確に動く、たとえば手がより素速く動く、など——、そうではない職人の労働とは違っている。

このような労働の具体的側面を**具体的労働** (concrete labor) と呼ぶ。具体的労働で問題になっているのは労働の質であり、それぞれの労働が違っているということである。生産物の有用性をもたらした有用な労働はこの具体的労働である。具体的労働の違いが生産物の有用性の違いになったのであり、有用な生産物の分量の違いになったのである。

この有用性の違いは、もし生産物が物的な財貨(たとえばシャツ)であるならば有用物の違いと言うことができる。また、もし生産物がサービス(たとえば岩の移動)であるならば有用効果の違いと言うことができる。

ところで、たとえば、シャツとテーブルとでは有

用性の質が異なるが、それはシャツを生産する具体的労働(たとえば裁縫労働)とテーブルを生産する具体的労働(たとえば木工労働)とが異なるからである。また、たとえば、ヘボが縫ったシャツと名人が縫ったシャツとでは有用性の量が異なるが、それはヘボの具体的労働(たとえば縫い目が一定にならないような裁縫労働)と名人の具体的労働(たとえば縫い目が正確であるような裁縫労働)とが異なるからである。

これにたいして、一人の個人が一日の労働を割り振ることを考えてみよう。たとえば、一日に行う労働時間が時間6時間であり、そのうち、シャツをつくるのに4時間、シチューをつくるのに2時間、割り当てると仮定しよう。実際には綿のシャツを生産するのには、綿布の裁断だけではなく裁縫も必要であり、したがって最低限、綿布・糸のような労働対象とともに、ハサミ・針のような労働手段が必要になるだろう。しかし、ここでは、話を単純にするために、たとえば古代ローマのトガのように、裁縫を省略してつくられるシャツを考えてみよう。そうすると、綿布の裁断だけを考えればいいことになる。この場合に、シャツを生産する裁断労働とシチューを生産する調理労働とは、具体的労働としてはまったく違っているにもかかわらず、一日の労働時間の構成部分としては全く同じである。あるいはまた、そもそも「一日の労働」を考えた時点ですでに、どういう種類の、どういう具体的労働であるのかは全く問題にならない。炊事労働も掃除労働も裁縫労働も耕作労働もすべて含んで「一日の労働」なのである。このような労働の抽象的側面を**抽象的労働** (abstract labor) と呼ぶ。抽象的労働で問題になっているのは、労働の量であり、どの労働も同じだということである。

砂糖と塩とは全く異なる物質だが、それにもかかわらず、両者の重さを足すことができる。たとえば、砂糖 1kg と塩 2kg とを混ぜると 3kg の混合物ができあがる。これは砂糖も塩も質量という共通な属性を持つからである。もっとも、砂糖や塩の場合には、色だとか結晶の大きさだとか、その他にも多くの共通な属性がある。

これにたいして、人間が労働を、——単なる物理的運動として位置付けるのではなく——，“自分の行為”として位置付ける限りでは、具体的労働を労働から取り除くと抽象的労働しか共通性はない。たとえば発汗だとか支出エネルギーだとか消費カロリーだとかのような共通性は物理的運動としての労働にしか当てはまらない。これにたいして、上で見たように、自分の行為としての労働、わざわざやる活動としての労働は、このような物理的運動を自覚的に、自由自在に操るものである。そして，“自分の行為”としての労働に共通するものは，“どんな種類の労働だろうと、その具体的な質のあれこれ（たとえば包丁を動かしたのか、のこぎりを動かしたのか）に関わりなく、どれも同じく、わざわざやったんだからこれだけのコストがかかった、すなわちこの分量だけ発揮された”ということにしかない。

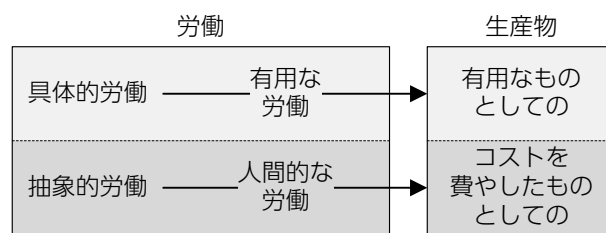
労働をコストとして考える際には、抽象的労働が問題になってくる。上の例のように、一定の労働時間をどういうふうに分けるか、あるいは逆に、いろいろな労働を足すと何時間になるのか、そういうことを考える際には、問題は、どのくらいの労働量——つまり抽象的労働の量——を支出しなければならないのかということである。あるいはまた、4時間の裁断労働と2時間の調理労働とでどっちが私にとって大きいコストをなすのかを考える場合には、重要なのは、裁断と調理という具体的労働の質の違いではなく、4時間と2時間という抽象的労働の量の違いなのである。

やや先取りになるが、以下の「2.4.4 新労働と旧労働」で見る新労働と旧労働との区別も、まだ『3. 社会と労働』で見る必須労働と剰余労働との区別も、具体的労働の、つまり労働の具体的形態の、たとえば掃除と調理との、違いではない。寧ろその様な具体的形態の違いは無視されている。それらは、労働をコストの面から捉えた上での区別であり、したがってまた抽象的労働の区別なのである。

労働力との関連で言うと、抽象的労働は、人間の労働力が——どんな仕方であれ——発揮されたということそのものである。これにたいして、具体的労働は、

人間の労働力があれやこれやの仕方で発揮されたということである。

図 9 生産物の二側面と労働の二側面



抽象的労働と具体的労働とは労働の二側面にすぎない。もっと言うと、なんの具体性もない抽象的労働なんてものが独立して存在するはずもなく、われわれの目の前に存在しているのは様々な具体的労働なのだから、抽象的労働は様々な具体的労働にきょうつうする共通性だということになる。

ところが、現代社会では、上で述べたように、生産物が商品である限り、価値としての生産物と有用なものとしての生産物とがてんで別物として現れるようになる。このことを通じてまた、労働のこの二つの側面もてんで別物として現れるようになる。すなわち、価値を形成するのが抽象的労働、有用なものを生産するのが具体的労働というように、てんで別物として現れるようになる。

2.4.4 新労働と旧労働

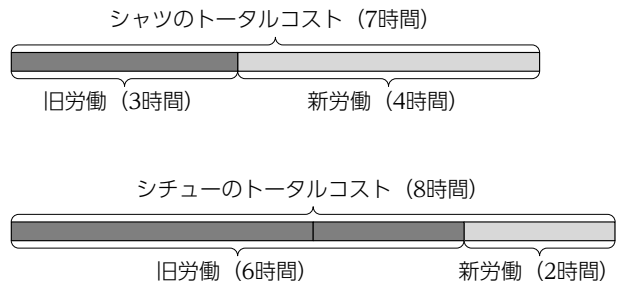
コストの話が出たところで、もう一つ重要な問題がある。それは新労働と旧労働との区別の問題である。上の例では、4時間の裁断労働と2時間の調理労働とでコストの比較を考えてみた。だが、実際に、その生産物であるシャツとシチューとにどれだけのコストがかかったのか計算しようとする、ことはそれほど簡単ではない。シャツを生産するには布(=労働対象)だとかハサミ(=労働手段)だとかのような生産手段が必要である。ところが、これらの生産手段は自然界には存在していないのだから、それ自身、労働の生産物であり、その生産には労働コストがかかっている。だから、その生産物であるシャツにどれだけのコストがかかったのか計算しようとする、4時間の裁断労働だけではなく、それらの生産手段を作るのにかかっ

た労働をもカウントしなければならない。同じことはシチューについても言える。

だから、一日の労働時間を割り振るのではなく、生産物にどれだけのコストが実際にかかったのか——これはたとえば一年の労働時間を割り振る場合に重要である——、計算する場合には、生産手段を前提して、いまどれだけの労働がかかったのかという新労働の分量（すなわち 4 時間の裁断労働と 2 時間の調理労働）だけではなく、その生産手段を生産するのに以前にどれだけの労働がかかったのかという旧労働の分量をもカウントしなければならないのである。このように、一定の生産物を生産する労働過程において直接に投下された労働が**新労働**である。たとえば、シャツ 1 着を生産する（われわれの例では布を裁断する）労働過程において直接に投下された労働が**新労働**である。これにたいして、この生産物の生産に使われた生産手段を生産する労働過程において投下された労働が**旧労働**である。たとえば、シャツ 1 着の生産に使われた綿布 1 メートル（シャツの原料）を生産する労働過程において投下された労働が**旧労働**である。

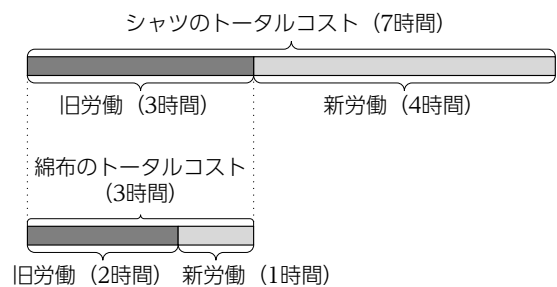
たとえば、シャツ 1 着の原料である綿布 1 メートルを生産する（織布する）のに 3 時間かかったと仮定しよう。また、シチューの原料である鮭 1 尾を生産する（釣り上げる）のに 4 時間、野草 1 人前分を生産する（採集する）のに 2 時間かかったと仮定しよう。それならば、——シャツ 1 着を生産する裁断労働とシチュー 1 人前を生産する調理労働とを較べると、つまり新労働を較べると、シャツを生産するコストの方がシチューを生産するコストよりも多いが——、実際には、旧労働を加えたトータルコストとしては、シチューを生産するコストの方がシャツを生産するコストよりも多くなる。

図 10 シャツとシチューとのトータルコスト比較



ここでは、綿布 1 メートルの生産コストとして 3 時間の労働を計算に入れた。この綿布の生産を考えてみると、その中には織布労働そのもの、つまり新労働と、綿布の原料である棉花を栽培する労働、つまり旧労働とが含まれているだろう。綿布 1 メートル分を織る織布労働が 2 時間、そしてその原料である——綿布 1 メートル分に必要な、たとえば 1kg の——棉花を育てて収穫する栽培労働が 1 時間だと仮定しよう。シャツの生産過程にとっては、綿布 1 メートルの生産のためのトータルコストである 3 時間の労働はすべて旧労働だった。これにたいして、綿布 1kg の生産過程にとっては、この 3 時間の労働の中で、2 時間の織布労働は新労働、その原料である棉花の生産のためのトータルコストである 1 時間の栽培労働は旧労働になる。

図 11 シャツのトータルコストと綿布のトータルコスト



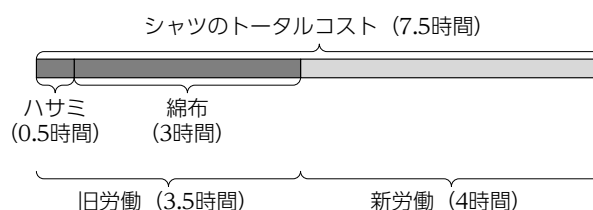
この点については、『3. 社会と労働』の図 9「新労働と旧労働（割当前）」とその説明を参照して欲しい。

ちなみに、——ここでは、物質代謝の社会的運営を度外視して、綿布もシャツもどちらも同じ個人が生産すると考えているが——、市場社会として

の現代社会では、シャツメーカーと綿布メーカーとは通常は別の業者であろう。そして、シャツメーカーにとっては、3時間の旧労働の部分のコストは市場での（たとえば1,500円分の）綿布の購入という形で現れる。そして、——もし仮に綿布メーカーが自社内で棉花から糸を紡績し、この糸を織布して綿布を生産しているとしたら——、2時間の旧労働の部分のコストは（たとえば1,000円分の）棉花の購入という形で現れる。

なお、裁断してシャツを生産するにはハサミも必要だろう。ハサミの場合には、シャツ1着分、したがって4時間裁断しただけでハサミが壊れるわけではないだろう。もしこのハサミの耐久性が100着のシャツの裁縫を可能にするほどあり、そしてこのハサミを生産するのにかかった労働がトータルで50時間だったとしたら、それならばこのシャツのトータルコストにはさらにハサミを生産するのにかかったトータルコスト、すなわち $50 \div 100 = 0.5$ 時間の旧労働が加わることになる。

図 12 ハサミのコストを含めたシャツのトータルコスト



なお、市場社会としての現代社会では、新労働の部分は付加価値として現れる（資本主義社会としての現代社会では、つまり、資本主義的営利企業では、量的には、付加価値＝賃金＋利潤である）。また、量的には、旧労働の部分は原料費（綿布の場合）として、あるいは減価償却費（ハサミの場合）として現れる。重要なのは、現代社会において行なわれているコスト計算の考え方は、現代社会に特有のものではなく、およそどの人類社会においてもあてはまるものだという点である。

2020/05/05 18:07 最終更新

最新版はオンラインで確認してください。このドキュメントの URL：
http://y-imai.com/lectures/handouts/econ_02.pdf